

吉見。むい。話にまぎれて少しは良くなつたやうだ。(縁に出て、空をみる。)しかし空の色はだんだんに悪くなるな。

中川。気分が好くなつたら、もう少し話して行け。時に吉見。大晦日の晩には貴公も見たらうな。(座に戻る。)あの女のことか。

中川。おれの話したのは嘘でないといふことが判つたらう。

吉見。おれはよもやと疑つて、念のために見とゞけに行くと、貴公に出逢つたので、先づ驚いた。それから續いてあの始末だ。

中川。おれもなんだか氣になるので、糸に引かれるやうにふらふらと奥庭へ踏み込んでゆくと、暗いなかで貴公に出逢つたのだ。

吉見。まだ不入の間へも踏み込まないうちに、姿をあらはしたのは不思議だな。

中川。そんな理窟がおれ達にわかるものか。なんにしても貴公もその姿をみたに相違あるまいな。あれが淀殿かどうかは知らないが、怪しい女のすがたは見とゞけた。(考へる。)併しおれにはまだ判らない。

中川。なにが判らない。貴公は現在自分の眼に見たものをまだ疑つてゐるのか。

吉見。眼に見たばかりではまだ本當に信じることは出来ない。それを信じるのはよく考へた上のことだ。あの女がたしかに其の淀殿だらうか。播州姫路の城には小坂部とかいふ古狐が棲んでゐるといふことだぞ。

中川。それではあの女も狐か狸だといふのか。

吉見。こんなに大きい古城のなかには、何が棲んでゐるか判るものか。不入の間などと恐れてゐるのを幸ひにして、古狐か古狸が巢を作つてゐるのかも知れないぞ。松が過ぎたらばおれはもう一度その正體を見とゞけに行かうと思つてゐるのだ。貴公も一緒に行かないか。

中川。むい。(かんがへてゐる。)

吉見。もう行くのは忌か。怖ろしいか。

(中川はだまつてゐる。)

吉見。あの女は貴公にむかつて、萬一餘人に洩すときは、この城内にたちまち禍が起つて、その方の命も無いと思へどと嚇したさうだが、貴公はその戒めを破つて、満座のなかで吹聴してしまつたではないか。

中川。おれも少しそれを後悔してゐるのだ。

吉見。その戒めが嘘でないならば、貴公は疾うに死んでゐる筈だ。この城内にも何かの禍が起つてゐる筈だ。

中川。併しまだ三日とは経たないのだからな。實はゆうべ不思議な夢をみた。

吉見。どんな夢をみた。

中川。その夢は……。おれの枕元へあの女があらはれて、おれを何處へか連れ出すので、なんだか判らずに附いてゆくと、おれのからだはふら／＼と宙を飛んで、天守櫓の頂上へ舞ひあがつてしまつた。と思ふと、女はおれの襟髪をひつ掴んで眞逆さまに濠のなかへ投げ落した……。それで夢は醒めると、からだ中にびつしよりと汗をかいてゐた。

吉見。なるほど元日早々から不思議な夢をみたものだ。(笑ふ)それも貴公があつた女を恐れてゐるからのことだ。狐か狸か正體も知れないものに嚇されて、そんなに氣が弱くなつては困るではないか。これ、しつかりしてくれ、しつかりして呉れ。江戸の侍の名折れになるぞ。

中川。江戸の侍の名折れになる。

吉見。む。たしかに名折れだ。中川圖書は大阪在番中に、得體も知れない化物に嚇されたなどと聞えては、貴公ばかりではない、おれ達までが臆病者の仲間入りをしなければならぬ。

のだ。

中川。(むつとして)では、吉見、貴公はおれを臆病者といふのか。

吉見。(あざ笑ふ)さう云はれても仕方が無いではないか。日頃から兄弟同様にしてゐるおれの意見だ。臆病や弱蟲はやめてくれ。

中川。(物の悪いやうに哮り立つ)兄弟同様にしてゐると云ふおれに向つて、臆病の弱蟲のと嘲弄して濟むと思ふのか。

吉見。嘲弄するのではない、意見するのだ。

中川。(いよく哮る)む。よく意見してくれた。その禮をするから庭へ出る。

吉見。(釣込まれたやうに、同じく喧嘩腰になる)なんだ。狐や狸を怖がつてゐる貴様が、武士に向つてそんな立派な口が利けるのか。

中川。おれに代つて、この刀が物を云ふのだ。さあ、起て。庭へ出ろといふのに……。 (吉見の手を把らうとする。)

吉見。(ふり拂つて)出ろと云ふなら、いつでも出てやる。貴様のやうな臆病者とは違ふのだ。

(吉見は肩衣をばれ退けて庭に飛び降りる。中川もつゞいて降り立ち、ふたりは刀をぬいて斬り結

源次。

ぶ。奥より源次は出て来りておどろく。
やあ、大變だ。まあ、お待ちください。これは一體どうしたのでござります。

源次。

(源次はうろたへて二人をひき分けようとするを、中川も吉見も退け退けと叱りながら闘ふうちに、空は俄に暗くなりて、稲妻さつと閃き、つゞいて激しい雷の音。吉見は思はず怯むところを附け入つて、中川はその高股を一太刀斬る。吉見は倒れる。源次はかけ寄つて吉見を圍ふ。)

中川。

お待ち下さい。お待ちください。
え、退け、退け。

源次。

もし、殿様、雷が鳴つてまゐりました。吉見さまの雷嫌ひはどなたも御存じのことです。こゝで討つては御卑怯になりませうぞ。

中川。

(躊躇する。稲妻又ひらめく。)む、あひにくの時に雷が鳴り出した。雷の音をきくが最後、半病人のやうになつてしまふ奴。こゝで斬つては卑怯になるだらうな。

源次。

(稲妻、雷の音。吉見は刀を手にして起ちあがる。)

吉見。

さあ、中川。なにを猶豫してゐるのだ。

中川。

いや、勝負はけふに限つたことではない。貴様の嫌ひな雷が鳴つてゐるぞ。

吉見。

なんの……。

(吉見は寄らうとするを、源次はおさへる。このとき稲妻いよ／＼閃き、奥にて凄まじき落雷の音。中川も源次もおもはず地に伏し、吉見も倒れる。やがて中川と源次は顔をあげる。)

源次。

ひどい雷でござりました。

中川。

今のは近くへ落ちたらしいぞ。

(中川は刀を鞘に納める。家のうしろより源八出で、枝折戸の外より聲をかける。)

源八。

殿様、雷が落ちたやうでござります。

源次。

どうも近いところらしいな。

中川。

見てまゐれ。

源八。

かしこまりました。

(源八は下の方へかけて行く。稲妻、雷の音。)

源次。

おゝ、鳴るわ。光るわ。もし、吉見様。おゝ、おゝ、足から血が流れて……。兎ちかくも奥へおいでなされませ。

雷
火

吉見。 (閉ぢたる眼をあく。) え、邪魔するな。これしきの浅手に弱るおれではないぞ。さあ、中川。勝負しろ。勝負しろ。

(吉見はよろめきながら又立ちかゝるを、源次は支へる。)

源次。 はて、折が悪い。今はおやめなさるが宜しうござります。

中川。 そんな弱蟲が相手になるか。源次、奥へ連れて行つて、傷の手當をしてやれ。

吉見。 なに、これしきの浅手に弱るおれではないぞ。さあ、貴様はどうしても勝負をしないか。

中川。 おれは卑怯者になるのは忌だ。勝負がしたければ、天氣のいゝ日に直して来い。

吉見。 え、出直すまでもないのだ。

(吉見は寄らうとするを、源次は支へる。稻妻、雷の音。源次は捨臺詞にて吉見をなだめ、介抱しながら無理に奥へ連れ込む。雪ふる。)

中川。 お、雪が降つて来た。雪が降つて雷が鳴るとは、こゝらに珍しいことだな。

(中川は空をながめてゐる。下のかたより内藤頼母と服部角之進、走り出す。)

内藤。 中川、大變だぞ。

服部。 天守に雷が落ちた。

中川。 今の雷は天守に落ちたか。

内藤。 落ちたばかりか、雷火が熾に燃えあがつてゐるのだ。

服部。 早く来い。早く来い。

(云ひすて、内藤と服部は引返して去る。雪はいよゝ激しく降る。雷の音。)

中川。 これは容易ならぬことになつたぞ。

(中川は袴の股立を取つて身仕度するところへ、下のかたより源八走り出す。)

源八。 お天守の天邊へ雷が落ちました。

中川。 燃えてゐるか。

源八。 燃えて居ります。

中川。 一緒に来い。

(中川は下のかたへ駆けてゆく。源八もついでにゆく。雪ふりしきる。非常を知らせる太鼓の音きこゆ。奥より吉見は刀を杖にして、片足をひき摺りながら出づ。あとより源次はおさへながら出づ。)

源次。 もし、どこへお出でなされます。

雷 火

吉見。

え、知れたことだ。今聞いてるれば、天守閣が雷火に焼けてゐるといふではないか。

源次。

でも、お前様はお怪我をなされてゐるではござりませぬか。

吉見。

貴様の主人が斬つたのだ。なに、これしきに……。

源次。

(吉見は傷いた足をひきながら、縁を降りようとして轉げ落ちる。)
それ、その通り……。おあぶなうござります。

吉見。

(吉見は下のかたへ行かうとして、又倒れる。太鼓の音。雪ふる。)
(じれる。)え、大事の場合に歩行が自由にならぬとは……。中川め、おれの足を斬つて……。

なぜ一と思ひに殺してくれないのだ。え、もういつそ……。

(吉見は焦れて狂つて、己が腹に刀を突き立てる。源次はおどろく。吉見は刀をひきまはす。下のかたより茶坊主七阿彌走り出づ。)

七阿彌。

お天守が焼ける。大變だ、大變だ。

(云ひながら内に駆け込み、吉見を見て又おどろく。)

七阿彌。

やあ、吉見さまが腹を切つて……。こ、これはどうしたのだ。

(この途端に、雷が又もや激しく鳴るに、七阿彌は耳をおさへながら大地にべつたりと坐る。源次も

うつ伏す。稻妻、雷の音。太鼓の音。)

(二)

中川。

御馬標に別條ない。中川圖書が確に守護して取り出したぞ。

(下にてわあと答へる大勢の聲きこゆ。中川はどうして降りようかと庇の上をみまはしてゐる中に、

火はいよ／＼燃えあがりて、天守閣の家根は崩れかゝり、焼けたる瓦はがら／＼と落ち来る。中川

は馬標をかつぎしまゝにて、庇の上に堂と倒れる。雷の音、雪ふる。天守閣は焼け落ちんとして動

揺す。)

雷

火

(三)

天守閣の下。日の暮れたる後。雷も雪もやみて、空には星が出てゐる。天守閣はなかに焼け崩れて、あたりに焼けたる柱や石瓦のたぐひが散亂してゐる。正面は裾に石垣のある堤にて、松の折れたるも見ゆ。よきところに籬が二ヶ所ほど焚いてある。

(大阪城代青山因幡守、五萬石の大名、火事装束にて馬に乗つてゐる。馬丁が馬の口を取り、平野市兵衛ほかに武士十四五人が火事装束にて従ふ。下のかたには内藤頼母、服部角之進、ほかに武士大勢、肩衣をはれたるもあり、袴の股立を取りたるもあり、思ひくの姿にて控へてゐる。)

因幡守。

不時の天災とは申しながら、由緒ある天守閣を雷火に焼かれたは残念であつたな。

平野。

いかにも残念至極に存じます。殊に正月の落雷などは思ひもよらぬことでもございました。

因幡守。

正月二日に激しい雷鳴、しかもこの天守閣に落雷するとは、まことに唯事とは思はれぬ。元和の落城より數ふれば五十年、大阪城の天守閣がこゝに忽ち焼亡するも、なにかの因縁であらうも知れぬぞ。いや、それらのことは扱措いて、権現様の御馬標には別條なかつた

か。

内藤。

中川圖書が火焰を冒して頂上にかけてあがり、無事に御馬じるしを取り出しました。

因幡守。

それはわしも見とどけたが、天守閣がこの通り焼け落ちると共に、中川は御馬じるしを守護したまゝで、濠のなかへ飛び込んでしまつたではないか。

服部。

何分にも高いところと云ひ、一面の猛火につままれて居りますので、濠へ飛び込むより外には逃げ道もなかつたものと察しられます。

因幡守。

水中に飛び込むときは、たとひ我が身をうしなふとも、御馬じるしに別條はあるまいと、咄嗟のあひだに思案を定めたものと見ゆる。(云ひかけて)それにしても大切のおん品、早く拜見いたさねば心が落ちつかぬぞ。

平野。

濠の上にはあまたの松明を照らさせ、唯今水中を探らせて居りますれば、しばらくお待ちくださいませ。

因幡守。

さりとて餘りに暇取れるではないか。

内藤。

御承知の通り、濠はなか／＼に深うござります。

服部。

殊に最早日も暮れましたれば……。

雷

火

因幡守。(せて)え、非常の、きには非常の働きをせねばならぬ。濠が深い、日が暮れたのと、え、何をぐづくいたして居るのか。誰か参つて催促いたせ。

内藤。はあ。(起ちかゝる。)

因幡守。いや、待て。誰彼と云はうより、わしが行つて直々に指圖する。皆もつゞけ。

(因幡守は一同を見返りて、みづから馬を進めんとする時、下のかたより奥山孫四郎、本多勘助の二人は火事装束にて松明を照らし、武士一人が金扇の馬標を持ち、そのあとより火事装束の武士廿餘人付き添ひて出づ。)

因幡守。お、御馬標は無事に引きあけたか。

(因幡守はよろこんで引返し、鞍より降り立てば、武士は馬標をまん中に押立てる。因幡守をばじめ、一同はそれに對して頭を下げる。)

因幡守。松明を近う。

二人。はあ。

因幡守。(奥山と本多は松明をさし付ければ、因幡守は馬標に近よつて検める。)幸ひに別條はなかつたやうだな。

奥山。水中より引揚げると、すぐに検めてみましたが、別條は無いやうでござりました。

因幡守。この大阪城鎮護のために、天守閣の頂上に祭り置かるゝ金扇の御馬標は、神祖家康公が彼の小牧山の合戦より小田原攻め、關ヶ原、最後には冬御陣、夏御陣、度々の戦場に武功をあけ給ひし天下無二のおん寶、たとひ天災とはいひながら、やみくゞこれを焼き失ふは恐れ多しと存じて居つたに、これで先づ安堵いたしました。みなも喜べ、よろこべ。

一同。おめでたうござります。

因幡守。む。めでたい、めでたい。それにつけても中川は如何いたしました。

本多。中川の死骸はあとより運んでまゐります。

因幡守。とても助かる見込みはないかな。

本多。總身が焼け爛れてる上に、水底に深く沈んで居りましたので、所詮救ふべき見込みはござりませぬ。

因幡守。あたら侍……惜しいことを致したな。

平野。まつたく惜しいことを致しました。この城内に禍が起つて中川が命をうしなふとは……

(ひとり言のやうに。)やはりあの一件が本當であつたかな。

雷 火

因幡守。あの一件とは……。

平野。いや、それはいづれ改めて申上げます。

(雪は又すこしく降り出す。下のかたより生田半藏は火事装束にて松明を持ち、中川の死骸を楯に乗せて、源次と源八に昇せ、ほかに醫師一人と武士五六人附添ひて出づ。)

因幡守。おゝ、中川か。その死骸をこれへ。

(生田は指圖して、死骸をまん中へ運び出し、その上に松明をかざせば、因幡守は進み寄る。)

因幡守。(悼ましげに。)なるほど總身が無残に焼け爛れて居るな。

生田。それでも死骸をひき揚げました時には、御馬標を両手にしつかりと持つて居りました。

源次。主人は泳ぎが達者でござりますれば、自分のからだ一つならば浮き上ることも出来たでござりませうが、御馬じるしを放すまいと一生懸命に持つて居りましたので、たうとう沈んでしまつたものと見えます。

醫師。火に焼かれ、水に溺れて、かくの通りでござりますれば、最早手當の致しやうもござりませぬ。

因幡守。中川の江戸屋敷には妻子があるか。

源八。おふくろ様と若い奥様がござります。

因幡守。子供はないか。

源八。まだお子供衆はござりませんが、弟御さまがござります。庄次郎と申しまして、今年十六になられました筈でござります。

因幡守。十六歳の弟があるか。それはせめてもの仕合せだ。このたびの功に因て、弟は相違なく後目相續、まだ其上に加増の御沙汰があらうも知れぬ。中川の働きはわしからも詳しく申立て、萬事よろしきやうに取計らつて遣はずぞ。

源次。源八。ありがたうござります。

平野。死骸はすぐに長屋へ引取らせても宜しうござりませうか。

因幡守。いや、常の死骸とは一つになるまい。一先づ大廣間へ運ばせて、城中の者一同が衣服をあらためて禮拜いたせ。

一同。はあ。

因幡守。(空を見る。)おゝ、又雪になつたか。早く運べ。

平野。それ。

雷 火

(平野が指圖すれば、源次と源八は再び死骸をかきあげ、先に附添ひ來りし生田と武士がその前後を圍みて、雪の降るなかを静かに上のかたへ運びゆく。因幡守をはじめ、一同は頭を垂れて敬禮す。時の鐘きこゆ。)

幕

江戸子の死

大正十五年十月作。

大正十五年十二月。松竹座初演。

初演當時の主なる役割——ほりもの師源七（小堀誠）駕籠屋のせがれ清吉（花柳章太郎）など。

登場人物——ほりもの師源七。源七の弟子宗八。駕籠屋のせがれ清吉。駕籠屋勘次。梅の井の女房おひで。梅の井の娘おきん。ほかに中間。職人。町人。地廻りの男。梅の井の女中と料理番。駕籠屋。往來の男。女など。

第一幕

(一)

江戸の末期。九月下旬の午後。

芝神明の附近。梅の井といふ小料理屋の前。正面は入口にて、左右には粹な板塀をめぐらし、門口には一本の柳が立つてゐる。塀の内には飛び石、短い暖簾をさげたる入口が見ゆ。

(料理のさゝ折をさげたる客二人と、神明の地廻りの男二人とが口論をしてゐるを、梅の井の女中が

江戸子の死

客 甲。留めてゐる。往來の男女四五人が立つて見てゐる。客も地まはりも皆酔つてゐる。
え、手前の方から突きあたつて置きながら、文句をいふとは何のことだ。料簡ならねえ。

料簡ならねえ。

男 一。料簡ならねえとはこつちで云ふことだ。おれたちがこゝを通りかゝると、門口からよろけて出て来やあがつて、いきなりに突き當つたんぢやあねえか。

男 二。それを逆捻ぢに喰つてかゝるとは、呆れ返つた病犬だ。さあ、どいつも手をついてあやまれ、あやまれ。

客 乙。べらばうめ。往來のまん中で手前たちのやうな獣物に土下坐が出来るか何うだか、考へてみる。

男 一。手前、どうしてもあやまらねえのか。

客 乙。知れたことよ。首に繩が附いても手前達にあやまるものか。

女中 一。(双方をなだめる。) まあ、お前さん達、もう好加減にして下さいよ。つまりが兩方の出合ひがしらなんですから、お互ひに堪忍したらいいぢやありませんか。

客 甲。どうしてこれが堪忍できるものか。さあ、手前からあやまれ。

男 二。え、手前からあやまれ。

(双方詰めよるを女中は隔てる。)

女中 一。あれ、もうお止しなさいと云ふのに……。

男 一。こんな奴をうちやつて置くと癖になる。(男二をみかへる。) 後日の見せしめに疊んでしまへ。

男 二。むい。遣付ける、遣付ける。

(男二人は刺青のある肌をぬいで、掴みかゝる。客二人も笹折を投げ出して掴み合ふ。このあひだに往來の見物がだん／＼に殖えて来る。)

女中 一。仕様がないうねえ。(奥にむかつて呼ぶ。) ちよいと、誰か来て下さいよ。喧嘩が始まつたんですよ。

(上のかたより駕籠屋のせがれ清吉、廿歳、素裕の小粋な姿にて出で、それと見るより、喧嘩のあひだへ割つて入る。)

清 吉。まあ、まあ、待ちねえ。商賣屋の店さきで喧嘩はよくねえことだ。まあ、静かにするがいぜ。(無理に双方をひき分ける。)

女中一。 あゝ、清ちゃん。 好いところへ来てお呉んなすつた。どつちも酔つてゐるもんだから……。

清吉。 むゝ、喧嘩の種は大抵わかつてゐる。まさかここで仇にめぐり逢つたといふわけでもあるめえ。いづれ突き當つたとか、足を踏んだとか云ふくらゐのいきさつだらう。(客二人に)もし、旦那。まあ、おまへさんの方から料簡して遣つちやあどうですな。

客甲。 なに、こつちは初めから喧嘩をする氣でも何でもない。

客乙。 賣られた喧嘩を買つたまでのことさ。

男一。 だれが喧嘩を賣つたのだ。

清吉。 まあ、いと云ふことよ。(女中に)おめえの家のお客さんらしい。間違けえのねえうちに早くお歸し申すがいぜ。

女中一。 あい、あい。(落ちたる笹折を拾はうとする。)

客甲。 そんなものはいらねえ、いらねえ。犬にでも遣つてくれ。それぢやあ仲人に免じておれ達はおとなしく引取るか。

客乙。 むゝ。あんまり人立ちがして見つともねえ。こゝはこの兄の顔を立て、素直に歸るとしようか。

女中一。 どうも失禮をいたしました。又お近いうちにお出直しをねがひます。

客甲。(男二人に)やい、こいつ等。云ひ分があるならいつでも來い。

男二。 行かなくつて何うするものか。

清吉。 もう止しなせえ。相手はおとなしく手を引いたんぢやあねえか。

客乙。 あゝ、馬鹿な目に逢つた。

男一。(客二人は上のかたへ立去る。地廻りの男二人は顔を見あはせて進み出づ。)

おい、駕籠屋のあにい。さつきから黙つて聽いてゐりやあ、ひどく好い男ぶつて、この喧嘩の扱ひをしなすつたな。あいつ等はそれで氣が濟んだか知らねえが、おれ達はなかく料簡するんぢやあねえから、その積りであつてくれ。

清吉。(笑ひながら)わつしの扱ひ方が悪かつたら、まあ、堪忍してくんねえ。なにしろ相手はもう行つてしまつたんだから、これで市が榮えたことにしようぢやあねえか。

男二。 その相手はだれが逃したのだ。おれたちの挨拶も聽かねえで、自分の一存で相手を逃がしたからにやあ、これからはお前が相手だ。

清吉。 まあ、好いといふことよ。仲人は時の氏神とさへ云ふぢやあねえか。その仲人を相手にし

て、喧嘩のまき直しをしたところで始まらねえ。まして不斷からまんざら知らねえ顔でも無し、おたがひに笑つて仲好く別れようぢやあねえか。その方が無事だらうぜ。

男一。いやだ、いやだ。どうしてこれが笑つて済まされるものか。さあ、手前が相手だ。もつとまん中へ来い。

男二。さあ、出て来い。

(二人は清吉の手をつかんで、前にひき出す。)

清吉。(ふり拂つて。)え、よせ。いくら云つても判らねえ奴等だ。それほど喧嘩がしたけりやあ、御注文通り、おれが相手になつて遣らあ。

女中一。あら、清ちゃん、おまへさんまでが……。およしさいよ。

清吉。なに、こいつ等は不斷からこの界限をあらし廻つて、まったく小うるせえ蚊とんほめ等だ。いつまでも人に引つからんで来やあがるなら、おれの方でもう料簡しねえからさう思へ。さあ、どいつでも来やあがれ。(肌をぬぐ。)

男一。(あざ笑ふ。)は、馬鹿に威勢がいゝな。(男二に。)おい、見や。駕籠屋の兄が肌をぬいだぜ。

男二。(同じく嘲けるやうに。)むゝ。折角肌をぬいだところで、生つ白いからだぢやあ睨みが利かねえな。おい、兄い。江戸つ子が肌ぬぎになつて喧嘩をするにやあ、からだの皮を一枚張り換へてからのことだぜ。

男一。生れたまゝのからだを剥き出しぢやあ始まらねえ。おれの脊中にやあ武藏坊辨慶を脊負つてゐるのだ。(脊中のほりものを見せる。)

男二。おいらのからだにやあ加藤清正が附いでゐるんだぜ。(同じく刺青をみせる。)眼を開いてよく見てくれ。

清吉。(俄に赫となる。)こん畜生。な、なにを云やあがる。片つ端からぶち殺すぞ。

(清吉はいきなりに下駄をぬいで手に持ち、二人を滅茶苦茶になぐり付ける。その勢の激しいのに氣を吞まれて、二人も流石に狼狽し、少しばかり抵抗してさんぐになぐられ、呆々の體で下のかたへ逃げてゆくを、清吉も追つてゆく。この喧嘩のあひだに、店の内より梅の井の女房おひでと娘おきんが出て、不安らしく眺めてゐる。)

おきん。清ちゃんももう好い加減にすればいゝのにねえ。
おひで。不斷はおとなしい人だけれど、やつぱり江戸つ子で氣が短かいんだね。

女中一。
おひで。

おきん。

おひで。

相手が刺青の脊中を出してみせたら、急に気がひのやうになつて暴れ出したんですよ。自分にほりものが無いので、気が怯けたんだらうよ。まつたく清ちやんは男は好し、氣前はよし、申分のない若い者だけれど、刺青のないのが瑕だねえ。
(口惜しさうに。)だつて、阿母さん。刺青のない人だつて世間に澤山あるぢやありませんか。
それも商賣に依りけりさ。裸稼業の駕籠屋の息子に刺青のないのは幅が利かないぢやないか。

(おきんは口惜しさうに黙つて聽いてゐる。やがて清吉は片手に下駄を持ち、はだしのまゝで引返して来る。)

女中一。

おまへさん、怪我はしませんでしたかえ。

清吉。

(息を切りながら。)あんな奴等に負けてたまるものか。思ふさま打つ挫いて遣つたのだ。

(おきんはつか／＼と清吉のそばに駆け寄る。)

おきん。

(泣聲になつて。)清ちやん。お前さんはなぜ刺青をしてくれないんだらうねえ。

(おきんは母への面當てのやうに、今や肌を入れようとしてゐる清吉の脊中を一つ打つと、清吉は又

おきん。

もや赫となつて、無言でおきんの鳥田髷をつかんで引摺り倒し、無闇にぼか／＼なぐり付ける。)

清吉。

あれ、なにをするんだよ。腹が立つなら寧ろそのこと、男らしく殺しておくれよ。

うぬ、殺してやるから覺悟しろ。
(清吉は再び下駄を取らうとするを、おひでと女中はあわてゝ支へる。)

女中一。

清ちやん。まあ、お待ちなさいよ。

おひで。

お前さん、ほんたうに氣でも違つたのかえ。何だつて馬鹿なことをするんだよ。呆れるぢやあないか。

やあないか。

(清吉は息を切つておきんを睨んでゐる。)

おきん。

阿母さん、構はないで置いてくださいよ。清ちやんはあたしを殺してやると云ふんだから。

おひで。

冗談お云ひでないよ。横町ののら犬ぢやあるまいし、人間ひとりや無暗にぶち殺されてたまるものかね。清ちやん、なんだつて家の娘をこんなひどい目に逢はせたんだえ。ほりものが無いと云つたのが何うしたんだえ。おまへさんは何と思つてゐるか知らないが、このおきんはあたしの大事の娘なんだよ。指でも差すと承知しないから、さう思つてゐるがい

い。巫山戯た真似も好加減にしておくれよ。

清吉。
おひで。

(いよく激昂して。) え、なぐらうが殺さうがおれの勝手だ。この女はお、おれの女房だ。なに、この女はおれの女房だ……。おまへさんは誰を媒酌人に頼んで、いつの幾日に家のおきんを女房に貰つたんだえ。神明さまの手洗ひ水で顔でも洗つておいでよ。まつびる間から寝ほける奴があるものかね。ばか／＼しい。

(店の内より料理番の男二人と女中一人出づ。)

料理番一。

もし、おかみさん。どうしたんです。

女中二。

あら、おきんちやんが泥だらけになつて……。

料理番二。

往來なかで清ちやんと喧嘩でもしたのかえ。

おひで。

喧嘩にもなんにもお話になりやしない。(清吉に。) おまへさんのやうな唐人を相手にしてると、飛んだお笑ひ草だから、云ひたいことも我慢して、もうなんにも云ひませんよ。だが、ちよいとお断り申して置きますが、おきんはあたしの娘なんですからね。當人同士はどんな約束があるか知らないが、おきんを女房に貰ひたけりやあ、その脊中へ立派にほりものをしてお出でなさい。さあ、おまへもお這入りよ。家の前へこんな人立ちがするぢ

やあないか。

(おひではおきんを引立て、内へ入る。おきんは眼をふきながら無言で附いてゆく。)

料理番一。

なんだ。飛んだ人騒がせをするぜ。

女中二。

おきんちやんは可哀さうだねえ。

(料理番二人と女中二人も内に入る。見物人もだん／＼に散つてゆく。)

清吉。

(奥を睨んで。) うぬ、今に見ろ。

(清吉は下のかたへ一散に走り去る。店の内よりおきん再び出づ。)

おきん。

おや、清ちやんはもうゐない。(あたりを見る。) いくら腹が立つたつて、人の料簡も知らないで、本當にあたしを殺す氣になつたのかしら。

(内より女中一出づ。)

女中一。
おきん。

清ちやんは何だつてあんなに怒つたんでせうねえ。阿母さんにあんなことを云はれて、あたしもあんまり口惜しいから、つい一口云つたら、あんなに氣ちがひのやうになつて怒つたんだよ。

(内よりおひでも出づ。)

おひで。
あの氣ちがひはもう行つてしまつたやうだね。おきんを貰ひたけりやあ、その脊中へ立派にほりものをして来いと云つたら、眞青になつて顫へてるたよ。意氣地もないくせに、この女はおれの女房だもよく出来た。はゝゝゝゝゝ。
(おひでは笑つてゐる。おきんと女中は不安らしく左右をながめてゐる。)

(11)

芝、宇田川横町。ほりもの師源七の家。正面の上のかたには神棚を吊り、燈明が供へてあり。つゞいて二枚の襖あり。下のかたは三疊ぐらゐにて、正面は障子、そのうしろは沓ぬぎ、格子戸。上のかたは障子にて、その次に臺所のある心。家の外は隣家の板塀にて、塀のうちより松など見ゆ。
(家内の上のかたには長火鉢を置き、下のかたには中間甲が刺青を彫りたる肌をぬぎ、中間乙が團扇でその脊中を煽いでゐる。駕籠屋勘次は烟草盆で烟草をのみながら見てゐる。)

中間乙。痛てえか。痛てえか。我慢しろ。
痛てえ、痛てえ。なんだかチクリ〜痛んで来て、からだ中から熱が出さうだ。

勘次。はゝ、さう遣つてゐると、灸でも据ゑてゐるやうだね。

中間甲。まつたく灸を据ゑるより難儀だ。灸は皮切りだけで済むが、こいつは中々さう行かねえ。

けふは流石のおれも熱い涙がほろ〜こほれた。

中間乙。はゝ、弱い奴だ。どうせ生身へ針を刺すのだ。蚊に螫されたのとは些と譯が違はあ。齒を

喰ひしばつても我慢しなけりやあ男とは云はれねえぜ。

中間甲。おれもさう思つて我慢してゐるのだが、これぢやあ本當に遣り切れねえ。

中間乙。鬼の眼に涙とはそのことだ。もう此のくらゐで好いだらう。

(乙は團扇をやめる。甲は痛さうに肌を入れる。)

勘次。だれでも一遍は泣かされるものさ。今もいふ通り、どうで生身に針をさすのだから、樂な仕事でねえことは初めから判つてゐるが、まつたく一通りの刺青を仕上げるにやあ、並大抵の辛抱ぢやあねえ。おまへさん達もまだ當分は苦まなけりやあなるめえよ。

中間甲。おめえの商賣はなんだね。

勘次。駕籠屋さ。

中間乙。どうもさうだらうと思つた。それぢやあ刺青は商賣道具だね。

江戸子の死

勘次。

おまへさん達は云はゞ道楽半分だが、わつし等のやうな裸稼業の者はさうぢやあねえ。駕籠屋の脊中に刺青が無かつた日にやあ商賣が出来ねえやうなものだから、どんな痛い目をしても拵へあけてしまはなければならねえ。まあ、見なせえ。わつしも泣きながらこれだけ仕上げたのさ。(自慢さうに肌をぬいで朱入りの刺青をみせる。)

中間甲。

なるほど、こいつは立派なものだ。

中間乙。

朱入りのほかしは餘計に痛むといふぢやあねえか。

勘次。

そりやあ痛えのさ。墨でさんぐ泣かされて、また朱で泣かされる。まるで拷問に逢つてゐるやうなものさ。

中間甲。

だが、刺青もさうなると豪勢だな。

中間乙。

おめえのやうな弱蟲ぢやあ、とても朱入りまでの我慢は出来めえ。まあ墨だけで、我慢して置くことだ。

中間甲。

かう云ふのを見ると羨ましくなつて、どんな切ない思ひもする氣になるが、さて取りかゝつてみると中々難儀だ。

勘次。

(肌を入れながら。)氣の弱いものは中途で一度や二度は止めたくなるものさ。それも痛いだ

けぢやあねえ。第一に……。 (指を丸くしてみせる。)これが要る仕事だからね。錢の三百や四百持つて来たからと云つて、物の一寸と彫つてくれるわけぢやあねえ。一切れを満足に仕上げるにやあ、どうしても一分は要るんだから、からだの方はどんなに我慢するとしても、ふところの我慢が續かねえ。わつし等のやうな貧乏人にやあ、その方の苦勞が一倍難儀だ。

中間乙。

そりやあ御同様だ。からだの痛いばかりなら我慢もするが、懐ろの痛むには全く往生だよ。

(奥より職人が肌をぬいだまゝにて出づ。)

勘次。

どうだえ。よつほど拵が行つたかね。

職人。

なにさ。まだ一向に埒が明かねえやうだ。(背中を見せる。)

勘次。

むゝ。それでも筋彫りは大抵出来たやうだから、これまで漕ぎ付けりやあ先づ一息つけるといふものだ。これから先は眼をつぶつても自然に出来らあ。

職人。

これからが餘計に痛てえといふ話だが、さうでもあるめえか。

勘次。

二三度も熱が出ると覺悟してりやあいゝのさ。

中間甲。

その熱がおそろしい。からだの弱い奴は死ぬといふぢやあねえか。

勘次。

死ぬのも随分あるさうだよ。

中間甲。

(顔をしかめる。)死んぢやあ詰まらねえ。そいつはちつと恐れるな。

中間乙。

また弱いことを云やあがる。ほりもの師の敷居をまたいだ以上、その仕あけが満足に出来ねえで、中途半端で止めたなんぞと云はれた日にやあ、手前ばかりぢやあねえ、屋敷の部屋一統の面汚しだ。

勘次。

まつたく男の面よごしだ。一旦彫りかゝつた以上はもう取返しは付かねえ。生きるか死ぬか、まあ遣るところまで遣つてみるのさね。

中間甲。

(溜息をつく。)なにしろ命がけの仕事だな。

職人。

わつしなんぞも人にたびゝ意見されたのを、無理にかうして始めたのだから、一生懸命に我慢して、なんとか形をつけて貰ふつもりさ。(甲に。)おまへさんもまあ我慢しなせえな。

中間甲。

我慢するより外はあるめえよ。

中間乙。

泣きつ面をするなよ。見つともねえ野郎だ。手前のやうな奴と一緒に来ると、おれまでが肩身が狭くつてならねえ。

勘次。

はムムムム。

(源七の弟子宗八、奥の襖から顔を出して呼ぶ。)

宗八。

もう誰も待つちやあるねえかね。

勘次。

おい、おい。まだおれがゐるよ。

宗八。

(襖から出て来る。)親方はこゝらで一服してえと云つてゐるのだ。

勘次。

一服するのは勝手だが、おれのゐることを忘れちやあ困るぜ。

宗八。

(笑ひながら。)忘れられるのが忌だと思つたら、仕事場へ這入つて雁張つてゐることや。

勘次。

ぢやあ、さうしようか。(たち上る。)皆さん、御めんなせえ。(奥に入る。)

中間甲。

おれ達もそろゝ歸るかな。

中間乙。

あるけなければ手を引いて遣らうか。

中間甲。

馬鹿にしやあがるな。まさかにそれ程でもねえや。

職人。

(宗八に。)わつしはいつ頃に又來ようかね。

宗八。

やつぱり四五日は休まなけりやあいけめえ。無理をすると體の毒だ。今が大事のところだから無暗に酒を飲んぢやあいけねえぜ。

江戸子の死

職人。

そりやあ大丈夫だ。

宗八。

(職人と中等等は挨拶して歸る。宗八は長火鉢のそばに来る。)
おや、おや、火鉢の火が、螢だ、螢だ。

清吉。

(宗八は鐵瓶をおろして、炭取りの炭を火鉢についてゐる。下のかたより駕籠屋清吉が足早に出で、格子を手暴く明けて入り来る。)
御免なさい。

宗八。

(ふりかへる。)え、だしぬけにびつくりさせるぜ。いくらこの家だつて、案内も無しに這入つて来る奴もねえものだ。

清吉。

(立つたまゝで。)だから、御免なさいと云つたぢやあねえか。

宗八。

家へあがつて來てから御免なさいと云つたんぢやあ何んにもならねえ。(云ひながら清吉をみる。)お、駕籠屋の清さんか。なにしに來なすつた。

清吉。

親方は内かえ。

宗八。

親方は内に入る。丁度おまへさんの店の勘さんの仕事をしてゐるところだ。

清吉。

勘の野郎が來てゐるのかえ。(少し考へながら坐る。)まあ、いゝや。早く親方に逢はしてく

んねえ。

宗八。

大層せいてゐなさるね。

清吉。

だから、早くしてくれと云ふのだ。早くしてくれ。

宗八。

あい、あい。

(宗八は奥に入る。清吉は腰さげの煙草入れから煙管を出し、煙草をのまうとして煙管を又なげ出す。奥より刺青師源七、五十餘歳の坊主あたま、大きい眼鏡をかけ、粹なこしらへにて半纏をきて出づ。)

源七。

お、清さんか。神明様のお祭が濟んだら急に薄ら寒くなりましたね。まあ、こつちへお出でなせえ。(長火鉢のまへに坐りながら、宗八に。)おい、お茶でも淹れろ。

清吉。

(せかしくして。)もし、親方。わつしはお前さんに無理を頼みに來たのだ。けふは何うしても肯いて貰はなけりやあならねえ。

源七。

(笑ひながら。)は、大層むづかしい掛合らしいな。さうして、そのお前さんの無理といふのはどんなことですか。

清吉。 いかも一度頼みに来て、おまへさんに断られたのだが……。

源七。 あゝ、ほりものゝ事かえ。

清吉。 その刺青を今度といふ今度は何うしても彫つて貰はなけりやあならねえのだ。どうぞ肯いでお呉んなせえ。一生の願ひだ。

源七。 (眼鏡をはずしながら) 折角のお頼みだが、幾度云つても同じことで、おまへさんの脊中には刺青の乗らねえ體だ。やつぱり思ひ切つた方がようがすぜ。

清吉。 そりやお前さんばかりでなく、方々のほりもの師からも云ひ聞かされて、わつしもまあ

残念ながら諦めてゐるのだが、けふはもう何うしても我慢がならねえので、無理と知りつ

つお前さんの所へ駆け込んで来たのだから、そこを察して後生だから肯いてお呉んなせえ。お前さんは芝口で初島といへば、こゝらでも名の知れた大きい駕籠屋の息子さんだが、子供の時分から體が弱いので刺青ができねえ。裸稼業の家のむすこに刺青がねえといふのは困つたもので、わたしも萬々察してゐるが、こればかりは意地や我慢だけで押通せるわけのものぢやあねえ。一口にほりものと云つても、人間によつて刺青の出来る人と出来ない人がある。からだの弱い人間が生身に墨や朱を入れると、命にもかゝはると昔から決まつて

源七。 むるのだから、無暗なことをしちやあいけねえと、いかもよく意見をしてあげた筈だ。そりやおよく判つてゐますが……。 (涙ぐんで) 死、死んでも構はねえから、彫つてお呉んなせえ。もし、拜むから頼みますよ。 (摺り寄る。)

源七。 いや、それがいけねえと云ふのだ。今もいふ通り、お前さんのやうな弱い體の者がむやみに刺青をすると、命にかゝはるといふのに……。 わたしも商賣だから、お前さんがそれほどに頼むものを肯いてあげたいのは山々だが、見すく人間ひとりを殺すかも知れねえやうなことを、どうして迂濶に引受けられるものか。お前さんも年が若えから、何かの意地づくから一圖に赫となつて、そんなことを思ひ立つたのかも知れねえが、まあ、まあ、おとなしく諦めてゐる方が無事ですすよ。

清吉。 それがどうしても諦めてゐられねえのだから、どうぞ頼まれてお呉んなせえ。お禮は幾らでも出しますよ。

源七。 (笑ふ) お禮は幾ら貰つても、若い人をひとり見殺しにやあ出来ねえ。まつたく悪いことは云はねえから、お止しなせえ、お止しなせえ。(しづかに烟草をのんでゐる。)

(宗八は茶道具を持ち出て出づ。)

宗八。

親方、湯が沸いてるますかえ。

源七。

(鐵瓶に障つてみて。)こりやあいけねえ、まるで水だ。臺所へ持つて行つて、七輪でも沸かして來い。(鐵瓶を取つて出す。)

清吉。

あゝ、もう、それにやあ及ばねえ。わつしは湯も茶もなんにも要らねえ。

源七。

でも、まあ、わたしも飲むのだから……。 (宗八に)早く沸かして來い。

清吉。

(宗八は鐵瓶をうけ取つて臺所へゆく。源七は矢はり煙草をのんでゐる。)

源七。

(又すゝみ出る。)もし、親方。おまへさんはどうしても背いてお呉んなさらねえのかえ。

清吉。

(又笑ふ。)おまへさんも江戸つ子のやうでもねえ。どうも思ひ切りが悪いな。

清吉。

江戸つ子だから頼むのだ。おまへさんだつて江戸つ子だらう。頼まれたら後へは退かねえ

源七。

といふのが江戸つ子ぢやあねえか。わつしがこれほどに頼むのを、なんでおまへさんは背

源七。

いてくれねえのだ。

勘次。

だんく暴つほくなつて來たね。そんなに駄々を捏ねちやあ困るぜ。

勘次。

(源七は矢はり笑つてゐる。奥より勘次出づ。)

勘次。

どうも聞いたやうな聲だと思つたら、清さんが來なすつたのか。なんだか眼の色を變へて、

清吉。

おかしいぢやあねえか。えゝ、手前の知つたことぢやあねえ。引つこんでゐる。

源七。

おまへの店の息子さんが押掛けて來て、どうしても刺青をしてくれろと云つて、わたしを

勘次。

困らせてゐるところさ。

勘次。

おれもそんなことぢやあねえかと思つてゐたのだ。おい、清さん。おめえの心持はおれに

清吉。

もよく判つてゐるが、おめえのからだはおれ達のやうに頑丈に出來ちやあねえのだから、

源七。

むやみに刺青なんぞすると、命にかゝはると云ふぢやあねえか。刺青も大事だが命も

勘次。

大事だ、よく考へて見にやあなるめえぜ。

清吉。

(いよく急いで。)えゝ、横合から出しやばつて削口ぶつたことを云やあがるな。(兩肌をぬ

勘次。

ぐ。)さあ、親分。だれが何と云つても、おれはもうこゝを動かねえから、そのつもりで

勘次。

て呉んねえ。

勘次。

(清吉はあぐらをかいて、源七の方に脊中を向ける。源七と勘次は顔をみあはせる。)

勘次。

かうなつちやあ仕様がねえ。(源七に。)なにか軽いものでも彫つて遣るわけにやあ行かねえ

勘次。

ものかね。

源七。

さあ。(かんがへて)ぢやあ、もう一遍見てあけるかな。

清吉。

見るも見ねえもねえ。おれも江戸つ子だ。死んでも構はねえと云つてゐるぢやあねえか。

(源七は再び眼鏡をかけて火鉢のまへを離れ、清吉のうしろへ廻つてその脊中を見る。)

勘次。

(のぞいて)やつぱりいけねえかね。

清吉。

うるせえ。黙つてゐろ。

源七。

清さん。おまへはどうしても彫るのかえ。

清吉。

じれつてえな。さつきからあんなに頼んでゐるぢやあねえか。

源七。

ぢやあ、彫つてあげよう。

清吉。

彫つてくれるかえ。(向き直る。)

源七。

だが、けふはいけねえ。

清吉。

なせいけねえ。

源七。

お前さんのからだには酒の氣がある。

清吉。

嘘をつきねえ。今日はまだ一度も酒を飲みやあしねえよ。

源七。

酒は飲まねえでも、なにか味醂の這入つたものを食ひなすつたらう。

清吉。

さあ。午飯のときに……。 (少し考へる。) そいつは何うも判らねえな。

源七。

煮物のなかに味醂が這入つてゐたらしいぜ。

清吉。

(少し困る。) 味醂の氣があつてもいけねえかえ。

源七。

む。酒は勿論だが、味醂もいけねえ。少しでも酔つたやうな氣があると、墨をさしても

皆んな散つてしまふからね。

勘次。

成程、さう云ふものかなあ。

(勘次は源七の顔を見ると、源七は眼で知らせる。)

源七。

さういふわけだから、清さん、けふはまあ歸つて又出直しておいでなせえ。第一、ほりも

のをすると云つても、けふからすぐに取りかゝられるものぢやあねえ。先づお前さんのか

らだに嵌まるやうに圖取りをしてからのことだが、一體なにを彫つてくれと云ひなさるの

だね。

清吉。

それにもまた註文があるのだ。ちつと面倒かも知れねえが、嵯峨や御室を彫つて貰ひてえ。

源七。

嵯峨や御室……。 (やゝ驚いたやうに。) 光國と瀧夜叉かえ。

勘次。

(これも驚いて。) 光國と瀧夜叉……。 二人立ちやあ大仕事だ。

江戸子の死

清吉。

無理でもそれを頼みますよ。

源七。

まあ、まあ、いゝや。光國でも瀧夜叉でも彫つてあげませうよ。だが、今もいふ通りで、けふはいけねえ。そのうちに下圖を置いて置きますから。十日ほど経つたら又お出でなせえ。

清吉。

十日……。もつと早く出来ませんか。

源七。

わたしもこれで中々いそがしい。おまけに二人立と來ちやあ下圖をこしらへるだけでも容易なことやあねえ。口幅つたいことを云ふやうだが、わたしも宇田川町の源七だ。あんまりぞんざいな仕事をしちやあ世間のお笑ひ草になりますからね。

清吉。

(よんどころなく。) さう云はれると、無理にとも云はねえ。それちやあ十日過ぎたら又來ますよ。

源七。

それまでには段取りを付けて置きます。

清吉。

(肌を入れながら。) なにぶん宜しくねがひます。どうも色々な我儘を云つて済みませんでした。まあ、堪忍しておくんせえ。おい、勘次。おれと一緒に歸らねえか。おれはまだこれからだから、一足先へ行きなせえ。

勘次。

清吉。

さうか。それちやあ親方。

源七。

またお出でなせえ。

清吉。

大きにお邪魔をしました。

(清吉は挨拶して下のかたへ立去る。)

勘次。

親方、あんなに受合つて大丈夫かえ。

源七。

(顔をしかめる。) どうも困つたものだが、あんなに氣が立つてゐるところを幾ら意見しても無駄なことだ。一旦は素直に承知して置いて、十日過ぎに出直して來たら、下圖がまだ出來ねえと云つて又斷る。それを幾度もくり返して、廿日も一月も引つ張つて置くうちには、相手もだんぐりに倦きて來る。そこでもう一度、意見のお灸を据ゑてやるのだ。

勘次。

さすがに親方は心得たものだな。それちやあ何うしてもいけねえのだね。

源七。

いくら見直しても、いけねえ、いけねえ。(頭をふる。) あんな體に墨をさすのは、毒をさすのも同じことだ。立派な若え者をむざむざ殺してたまるものか。裸稼業に刺青が無くつて困るなら、今のうちに商賣換へをすることだな。

勘次。

と云つて、商賣がへも困るだらうな。(云ひながら清吉の烟草入れに眼をつける。) おや、こり

やあ清さんの烟草入れだ。は、随分慌てゝるるぜ。歸りにおれが持つて行つて遣らう。

(勘次は烟草入れを把つて笑ひながら下に置く。宗八は鐵瓶を持つて出づ。)

宗八。湯の沸かねえうちに清さんは歸つてしまつたね。

源七。まあ、いゝから早く茶を淹れろ。

勘次。さつきから随分ひまを潰してしまつた。茶なんぞはどうでもいゝから、早く遣つてくんねえ。

源七。おめえも氣が短けえな。それぢやあ宗八。奥へ連れて行つて些と突ツついてゐろ。

宗八。あい、ようがす。勘さん、來なせえ。

勘次。え、おめえが遣るのかえ。こいつは痛てえぞ。お念佛、お念佛。

宗八。痛てえどころか。おめえのやうな體を突ツつくと、針の方がたまらねえや。ねえ、親方。

源七。むゝ。(笑ふ)人間のからだを突ツつくと思つちやあいけねえ。まあ、馬の皮を叩くつもりで遣るんだな。

勘次。へん、太鼓ぢやああるめえし、馬鹿にするぜ。

(宗八と勘次は奥に入る。源七はひとりて茶を入れてゐる。下のかたより清吉は引返して出づ。)

清吉。御めんなさい。どうもこゝの家に忘れものをしたらしい。(云ひながら内に入る。)

源七。忘れものは烟草入れぢやあねえかね。

清吉。あゝ、こゝにあつた。(烟草入れを取る。)どうもたび／＼お邪魔をしました。

源七。丁度茶が這入つたところだ。一杯のんで行きなさらねえか。

清吉。切角だが、又來ませう。十日過ぎといふと、來月の五日ですね。

源七。まあ、さうですね。

清吉。ぢやあ、屹と頼みますよ。

(清吉は烟草入れを腰にさして出てゆく。源七は困つたものだといふ顔をして見送る。)

幕

第二一幕

芝、宇田川横町。源七の家。道具はすべて前とおなじけれど、第一幕より三月ほど過ぎたる後と知

るべし。十二月下旬の雪ふる朝。

(弟子の宗八は手拭で頬かむりをして表の雪を掃いてゐる。家のそばには大きい雪達磨が出来てゐる。第一幕の職人が番衆をさして出づ。)

職人。

宗さん お早う。朝から雪かきかえ。

宗八。

親方がやかましいから掃いてゐるが、あとからあとから積るので埒があかねえ。

職人。

まつたくよく降るぜ。(云ひながら雪達磨をみかへる。)は、素敵に大きい達磨が出来たな。

宗八。

いつの間にかそんなものを拵へてしまやあがつて……。それが解け始めた日にやあ遣切れ

ねえ。

職人。

こいつが解けたら、當分はこゝの家の前は往來止めだ。は、は、は。

宗八。

なにしろまあ這入りねえ。寒い寒い。

職人。

雪のふるせるか、けふは些と冷え過ぎるぜ。

職人。

(宗八は先に立ち、職人もつゞいて内に入り、そこに出てゐる角火鉢の前に坐る。)

職人。

親方はまだ寝てゐるのかえ。

宗八。

親方は早起きだから、疾うに起きて朝湯に行つたのよ。

職人。

相變らず威勢がいゝな。おれなんぞは若いくせに意氣地がねえ。かぜを引いて四五日寝込

宗八。

道理で顔の色がよくねえと思つた。それでもう熱はすつかり取れたのかえ。

職人。

まだ少し熱はあるやうだが……。いけなからうか。

宗八。

少しでも熱があつちやあいけねえ。そんなときにやあ休む方がいゝぜ。熱のあるときに刺

職人。

青をして、それから急に熱が高くなつて、たうとう死んだ人があるからね。

職人。

(不安らしく。)さうかな。それぢやあおれももう少し休まうか。

宗八。

その方がよからうぜ。おまへなんぞはもうそこまで出来上つたのだから、一日や二日を争

職人。

ふことはねえ。まあ、大事を取つたらどうだ。死ぬほどの事はなくつても、歳の暮に倒れ

と困るぜ。

職人。

それもさうだな。折角癒りかゝつたところを又悪くしちやあ詰まらねえ。それぢやあ今日

宗八。

も休むとしようか。親方が歸つたら宜しく云つてくんねえ。

職人。

早く歸つて引つ被つてゐるがいゝよ。

職人。

ちげえねえ。命あつての物種だからな。

あもう誰も来やあしめえ。一杯飲んで炬燵にでも潜り込むか。は、年を取つちやあ意氣地がねえ。

宗八。

源七。

(障子から出る。)でも、駕籠屋の清さんが来るかも知れませんぜ。(顔をしかめる。)む。あの男にも困つたものだ。おれも長年この商賣をしてゐるが、まつたくあの男にやあ泣かされるな。

宗八。

源七。

あんなことをしてゐたら、清さんは死にますぜ。死ぬだらうよ。

宗八。

源七。

あ、忌だ、忌だ。(源七は溜息をつく。宗八は再び臺所に入る。下のかたより駕籠屋勘次は番傘をさして先に立ち、清吉を駕籠に乗せて出づ。)

勘次。

駕籠屋。

(駕籠屋に。)ぢやあ、いつもの通りに迎ひに来てくんねえよ。承知だ、承知だ。(勘次と駕籠屋ふたりは清吉を介抱して駕籠から連れ出す。清吉は色青さめて瘦せ衰へてゐる。勘次)

勘次。

源七。

は清吉を格子の内へ連れ込むと、駕籠屋は空駕籠をかついで去る。お早うござえます。どうも悪いものが降り出しましたね。だれた、誰だ。まあ、こつちへ這入んねえ。

源七。

勘次。

源七。

(勘次は清吉を扶けて入り来る。清吉は黙つて俯向いてゐる。)この天氣に朝からよく出て来たね。けふは休んだがよからうと云つたのだが、清さんがどうしても肯かねえのさ。(暗い顔をして。)さうかえ、よく精が出るな。いくら商賣で乗物が自由だからと云つて、けふのやうな日に出て来るのは大抵なことぢやあねえ。馬鹿に寒いから、まあ手でもよく炙りなせえ。その火鉢に火があるかえ。

勘次。

源七。

勘次。

源七。

火はカンノ起つてゐますよ。(清吉に。)おまへもよく當りなせえ。(火鉢を清吉の前に押遣る。)時に宗公はどうしましたえ。宗の奴は臺所で鐵砲の料理番よ。あ、河豚か。河豚をこしらへるなら、おれが上手だ。(臺所に向ひて。)おい、宗公、おれが今行つて手傳つてやるから待つてゐる。

宗八。

(臺所で)なに、邪魔に來ねえでもいよよ。

勘次。

なにが邪魔だ。これでも八百善で年季を入れて來たのだ。

宗八。

べらばうめ。八百善で河豚を食はせるものか。

勘次。

なんでも好いから、その料理番はおれに任せろといふのに……。河豚と聞いちやあ堪らねえや。

(勘次は起つて臺所に入る。清吉は矢はり黙つて俯向いてゐるを、源七は悼ましさうに眺めてゐたるが、やがて徐かに話しかける。)

勘七。

清さん。顔の色がどうも良くねえやうだが、この雪にでも中つたのぢやあねえかね。

清吉。

(力のない聲で。)別にそんなこともありませんよ。雪が降るから今日は休んだらよからうと、勘次や家の者にも云はれましたが、まあ思ひ切つて出かけて來ました。

源七。

出かけて來るほどの元氣がありやあ結構だが……。 (烟草をのみながら清吉の顔をつつく見る。)そこで、どうです。けふも遣りますかえ。

清吉。

勿論遣つて貰ひたいから、斯うして出て來たんですよ。遣つてあけるのは譯はねえが……。 (又かんがへる。)どうもお前さんはひどく顔色が悪いや

源七。

うだね。わたしは氣をつけて見てゐるが、お前さんの顔色は一日増しに悪くなるやうだ。この上に無理をしちやあいけませんぜ。

(清吉は無言で聽いてゐる。)

源七。

もし、清さん。こんなことはもう幾度云つたか判らねえから、今さら七くどくお洩ひをするにも及ばねえやうなものだが、この九月の末におまへさんが駈込んで來なすつて、どうしても刺青をしてくれといふ。おまへさんのやうな弱い體に刺青をすれば命にもかゝはると、わたしが色々云つて聞かせてもなかく肯かねえ。その後もつゞいて押掛けて來て、いつまでも強情に責められるので、こつちも仕舞には根負けがして、それぢやあ仕方がねえ、まあ遣つて見ませうといふことになつたのだが、手輕いものなら未だしものこと、嗟哉や御室の光國と瀧夜叉の二人立、そんな大がかりの物がどう考へてもお前さんの脊中に乗るわけのものぢやあねえ。案の通り、熱はたび／＼出る。體はだん／＼に疲れて來る。それから三月ばかりのうちに滅切りと弱つてしまつて……。正直をいへば此頃のお前さんは、生きてゐる人とは見えねえくらゐだ。家の人達もひどく心配してゐなざると云ふことを、あの勘さんからも聽いてゐますよ。

清吉。

親父やおふくろは勿論のこと、勘次をはじめ皆んなも心配してくれるのですが……。(苦し
さうな息をついて)わつしはどうしても此のほりものを仕上げてしまひたいのです。

源七。

それがいけねえ、それが考へ物だ。おまへさんの刺青は、三月もかゝつて漸く筋彫りが出
來上つたばかりだ。これから肉を入れて、朱をさして、本當に仕上げてしまふまでには、
まだ幾日かゝるか判つたものぢやあねえ。(云ひかけて少しく詞をあらためる。)お前さんはそ
れまで生きてゐられるかえ。

清吉。

それはわつしにも大抵わかつてゐますが……。

源七。

どう判つてゐるのだね。

清吉。

どうせ長い壽命はあるめえと思つてゐますよ。

源七。

さう判つてゐるならば、決して無理をすることはねえ。こゝらでもう思ひ切つたらどうで
すえ。

清吉。

今さら思ひ切つたところで、もう取返しは付かねえ。此頃からの様子ぢやあ何うせ助
からねえと覺悟してゐるんですから、わつしの息を引取るまで構はずに彫つておくんなせ
え。(云ひかけて俯伏す。)

源七。

ひどく息苦しさうだな。まあ、湯でも飲みなせえ。

(源七は鐵瓶の湯を茶碗について、清吉の前に持つてゆけば、清吉は顫へる手にうけ取つて一口飲
む。源七はいよゝ悼ましさうにそれを眺めてゐる。)

源七。

いくらお前さんが構はずに遣れと云ひなすつても、見すゝお前さんが死んでしまふのを
唯見物してゐられるものぢやあねえ。(わざと聲を暴くして。)おまへさんも随分強情だね。
人の親切を無にするとは全くこのことだ。おれも呆れ返つてしまつた。

清吉。

(源七は起つて元の座に戻らうとすれば、清吉は這ひ寄つてその着物の膝のあたりを掴む。)
親方、親方。おまへさんが腹を立つのも無理はねえ、無理はねえ。全くわつしは命知らず
の強情者に相違ねえ。おまへさんの意見をきかねえで、たうとう壽命を縮めてしまつた
のだ。(涙をふく。)だが、親方。わつしが無理無體に刺青をしようとしたのは、些と譯のあ
ることだ。譯のあることだ。かうなつたら何も彼も云つてしまふから、まあ聽いてお呉ん
なせえ。

源七。

(云ひかけて又うつ伏すを、源七は優しく抱へ起す。)
まあ、急いぢやあいけねえ。話して聞かすことがあるなら落ちついて云ひなせえ。やれ、

やれ、湯をこぼしてしまつた。

(源七は再び鐵瓶の湯を茶碗について、清吉に飲ませてやる。)

清吉。駕籠屋のせがれに生まれながら、體が弱いので刺青が出来ねえ。それを不斷から口惜しく思つてゐるところへ……。この九月の末に神明の梅の井……。親方も知つてゐる筈だが……。

源七。むゝ、知つてゐる。梅の井といふのは、おきんちやんと云ふ好い娘のゐる家だ。

清吉。そのおきんといふ女と……。わつしは前から約束をしてゐたので……。

源七。(うなづく)むゝ、さうかえ。おきんちやんとお前さんと……。それでどうしたえ。

清吉。梅の井の店の前で、地廻りの奴等と喧嘩をして、わつしが肌をぬいだところを、おきんの奴が見付けやあがつて、清ちやん、お前さんはなぜ刺青をしてくれないんだと云つて、わつしの脊中をびしやりとなぐりやあがつたので……。 (口惜しさうに聲を顫はせる。) わつしに刺青の出来ねえことは百も承知でありながら、往來なかで、大勢の見てゐるところで、わざとそんな事を云やあがつたから、わつしも赫と逆上せあがつて、おきんの島田を引つ掴んで引摺り倒して、めちやく／＼になぐり付けて遣つたのです。

源七。そりやああんまり手暴かつたな。店の前でそんなことを遣つちやあ定めて大騒ぎになつたらう。

清吉。女はなぐられながら、いつそ一思ひに殺してくれと云ふと、おきんのおふくろが飛び出して来て、わつしをさん／＼毒突いた上に、當人同士はどんな約束があるか知らないが、おきんを女房に貰ひたけりやあ、その脊中へ立派にほりものをして来いと、かう云ふのです。もし、親方。さうなると、わつしも江戸つ子だ。唯もう口惜しくつてならねえ。ねえ、まつたく口惜しいぢやありませんか。

源七。むゝ。(うなづく。)

清吉。おきんを女房にするとか、しねえとか云ふことはもう二の次として、なんでもこの脊中に立派な刺青をして、梅の井の奴等に見せつけて遣らなけりやあ、どうしてもわつしの胸が納まらねえ。そこで、眞直にこゝの家へ飛び込んだ譯で……。嵯峨や御室の光國と瀧夜叉はあんまり手重いから、もつと手輕なものにしろと云ひなすつたが、それにも譯のあることとで……。一昨年の踊の浚ひに、おきんが嵯峨や御室の瀧夜叉を踊つて、大變に評判がよかつたから、どうせ彫るなら、その瀧夜叉を彫つて遣らうと思つて……。

源七。

成程さういふわけがあつたのかえ。瀧夜叉と光國はあんまり無理な註文だと思つたが、さう聞けば又無理のねえところもある。だが、清さん。(諭すやうに)おまへさんがいくら燥つても藻掻いても、その瀧夜叉は所詮出来ねえ相談ですぜ。

清吉。

出来ねえ相談とは初めから大抵承知してゐましたが、それが此頃ぢやあいよくはつきりと判つて來ました。弱い體に無理をしたので、わつしはもう長くは生きられせんよ。

源七。

(慰めるやう)なに、生きられねえと決まつたわけでもねえ。こゝらで刺青を思ひ切つて十分からだの養生をなさりやあ、まだ若えのだから癒らねえことはねえ筈だ。そんな氣の弱いことは云はねえが好うがすよ。それぢやあわたしの意見をきいて、素直に思ひ切りなさるかえ。

清吉。

わつしは命をなけ出して、死ぬまで彫つて貰ひてえと思ふのだが、どうしてもいけませんかえ。

源七。

(きつぱりと)なんと云つてももういけねえ。わたしは人を殺すのが商賣ぢやあねえ。

(源七は又立ちかゝれば、清吉は再び取付く。)

清吉。

親方。それぢやあもう決して無理は云はねえから、まあ堪忍してお呉んなせえ。

源七。

(優しく)むゝ。それぢやあ本當に思ひ切りなさるかえ。

清吉。

思ひ切る代りに、別のお願ひがあるのだが、背いてくれますかえ。

源七。

どんなお願ひだか知らねえが、わたしに出来ることなら背かうぢやありませんか。(坐る。)

清吉。

どうでわつしは死ぬ體だ。脊中の刺青は思ひ切る代りに……。(左の腕をまくる。これへ彫

つておくんなせえ。

源七。

それに何を彫らうといふのだ。

清吉。

位牌を彫つておくんなせえ。

源七。

位牌を……。

清吉。

(更に右の腕をまくる。)こつちの腕には石塔をたのみますよ。

源七。

左の腕に位牌、右の腕に石塔……。それを彫れと云ひなさるのか。

清吉。

わつしが眼を眠つたあかつきに、菩提所の和尚様に頼んで、戒名を書いて貰ふことにしますから、せめてそれだけは背いておくんなせえ。ねえ、親方。(涙ぐむ。)

源七。

(眼をしばたゝいて)むゝ、ようがす。おまへさんの兩方の腕に、位牌と石塔を屹と彫つてあけませう。かうなりやあわたしも一生懸命に腕を揮ひますよ。

江戸子の死

清吉。ありがてえ、有難てえ。なにぶんお願ひ申します。

源七。そこで、今日から取りかゝりますかえ。

清吉。あすをも知れねえ體だから、なるたけ早く遣つて貰ひてえのですが……。

源七。ぢやあ、すぐに仕事場へおいでなせえ。

源七。おい、どうした、どうした。

源七。おい、清さん。しつかりしねえか。おい、清さん。

源七。おい、清さん。しつかりしねえか。おい、清さん。

源七。おい、清さん。しつかりしねえか。おい、清さん。

宗八。河豚はもう直に出来ますよ。

源七。河豚ぢやあねえ、早く来てくれと云ふのに……。

勘次。なんだ、なんだ。

(勘次と宗八は臺所から出る。源七は勘次の耳に口をよせ、清吉を指さして囁けば、勘次も清吉をのぞいて驚く。)

勘次。こりやあ大變だ。早く家へ知らせて来なけりやあならねえ。

宗八。(小聲で。)どうしても危ねえのかね。

源七。(かんがへて。)おめえはこれから神明の梅の井へ行つて、おかみさんと娘にすぐに来てくださいと云つて来い。

宗八。あい、あい。ようがす。梅の井へ行くんだね。

源七。おかみさんと娘を呼んで来るのだ。早くしろ、早くしろ。

宗八。こいつは傘なんぞ差しちやあるられねえ。

(宗八は腰に挟みし手拭を取つて、頬かむりをし、尻を端折りて表へかけ出して行く。清吉は低く唸つてゐる。源七は清吉をかゝへ起さうとして又思案し、そのまゝにして奥の仕事場へ入りしが、やがて刺青の道具を持ち出して来る。)

源七。(大きい眼鏡をかける。)さあ、清さん、しつかりしなせえ。(聲を高くして。)すぐに仕事に取りかゝるぜ。いゝかえ。

清吉。源七。

(さびしく笑ふ。) 親方……うまく遣つてくれますかえ。

さあ、左の腕を出しなせえ。先づお位牌から始めますよ。

(清吉はやうやく起き直りしが、案外にしゃんとして、左の腕をまくる。源七は束れたる針を把る。表には雪しづかに降る。)

幕

昭和三年八月二日印刷
昭和三年八月五日發行

綺堂脚本集第十三卷
(定價金貳圓參拾錢)

印檢者作著



著者 岡本敬二

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

發行者 和田利彦

東京市小石川區上富坂町三十番地

印刷者 新倉誠一

東京市小石川區上富坂町三十番地

印刷所 新倉東文堂

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
電話京橋六五二・四四一
振替口座東京一六一七

春陽堂

綺 堂 讀 物 集

三浦老人昔話

内容||桐畑の太夫、鎧櫃の血、人參、置いてけ堀、落城の譜、權十郎の芝居、春色梅ごよみ、旗本の師匠、刺青の話、雷見舞、下屋敷、矢がすり、

定價 壹圓八拾錢
送料 拾八錢

青蛙堂鬼談

内容||青蛙神、利根の渡、兄妹の魂、猿の眼、蛇精、清水の井、窯變、蟹、一本足の女、黄い紙、笛塚、龍馬の池、

定價 壹圓八拾錢
送料 拾八錢

近代異妖篇

内容||こま犬、異妖節、月の夜がた、水鬼、馬來俳優の死、停車場の少女、木曾の旅人、影を踏まれた女、鐘ヶ淵、河鹿、父の怪談、指環一つ、離魂病、百物語、

定價 貳圓
送料 拾八錢

綺 堂 戲 曲 集

全十卷

各定價 貳圓參拾錢
送料 拾八錢

527
16

3年9月28日

243

子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥

243

